

平成9年度厚生省心身障害研究

「生涯を通じた女性の健康づくりに関する研究」

「女性のリプロダクティブヘルスに関する研究」

分担研究報告書

分担研究者	北村 邦夫 ¹⁾
研究協力者	草野いづみ ²⁾
	我妻 堯 ³⁾
	廣井 正彦 ⁴⁾
	今関 節子 ⁵⁾
	安達 知子 ⁶⁾
	村松 泰子 ⁷⁾
	清水 敬子 ⁸⁾

要約：

世界保健機関（WHO）が定義するリプロダクティブヘルスとは、「人間の生殖に係るシステム、その機能と進行する過程のすべての側面において、単に疾病や障害がないというばかりでなく、身体的、精神的、社会的に完全に良好な状態にあることを指す。したがって、リプロダクティブヘルスとは、人々が安全で満ちたりた性生活を営むことができ、子どもを産むか、産まないか、いつ産むか、何人産むかを定める自由をもつことを意味する」。この定義を踏まえ、1997年度においては、以下二つのリサーチクエスチョンについて研究を進めた。

- 1) 家族計画と女性の健康に関する研究
 - 2) メディア情報が若年者のリプロダクティブヘルスに及ぼす影響
- 具体的に、1) については、わが国におけるリプロダクティブヘルスの現状、中でも、

-
- 1) (社) 日本家族計画協会クリニック
 - 2) オフィス・クレッセ
 - 3) 国際厚生事業団
 - 4) 山形大学医学部産科婦人科学教室
 - 5) 群馬大学医学部保健学科
 - 6) 東京女子医科大学医学部産科婦人科学教室
 - 7) 東京学芸大学教育学部
 - 8) (社) 日本家族計画協会クリニック

「家族計画」に係る諸問題について調査研究するとともに、低用量ピルをはじめとした近代的避妊法の導入が遅れているわが国に期待される将来に向けての取り組みなどについてまとめた。また、2)については、やや異色なテーマではあるが、近年、特に未婚期の若者達に見られる性行動の加速化、多様化などによってもたらされる望まない妊娠や性感染症への罹患など、生涯を通じた女性の健康づくりという面から、この時期の課題は極めて深刻である。特に、若者達の性行動や心身の健康に大きな影響を及ぼしているメディア情報にも着目して調査研究を進めた。

その結果の概要は以下の通りである。

- 1) 低用量経口避妊薬などの近代的避妊法の導入が、世界で最も立ち後れているわが国の場合、安全で有用な避妊法を手段とした家族計画・避妊サービスがいつでも、どこでも、誰にでも提供できるという保障が必ずしもない。本来、避妊法の選択に際しては、カップルの年齢、妊娠の受容性、結婚や出産経験の有無、出産間隔、避妊への理解や実行力、禁忌やSTDの有無などが重要な要素であるが、①わが国では、老若を問わず、コンドームと膣外射精のように男性に避妊の主導権を握られており、それが意図しない妊娠・出産の増加要因になっていることは否定できない。②世界を展望すると、ホルモン系避妊薬は、RU486と呼ばれる抗progestogen剤の使用、depot-medroxy-progesterone (DMPA) という3ヶ月に一度の注射法、抗progestogen剤による緊急避妊法、RU486とprostaglandin併用による薬物中絶法、progestogenとandrogen混合剤注射による精子産生抑制法などとともに、シリコンプラグを用いた精管閉塞法まで、かなりの進歩が認められている。低用量ピルとともに、薬剤付加子宮内避妊具が認可されていないわが国の避妊の後進性を嘆かずにはおれない。③セックスが未婚期にも当たり前に行われるようになってきている今日、この世代こそは、他の年代に比し尚更望まない妊娠を回避しなければならないのに、避妊法選択は、既婚者と変わらず男性に主導権を握られたものが主流。この際、世界的に注目を集めている緊急避妊法（エチニルエストラジオール0.1mg、ノルゲストレル1mgを避妊に失敗したセックスの72時間以内とその12時間後に投与）の必要性を感じている。④この若者の避妊法選択の傾向は、産み終え世代にあっても同様であり、38歳から50歳代の有経者197人の調査によっても、8割以上がコンドーム。ピルとIUDがそれぞれ4.3%、不妊手術は精管結紮0、卵管結紮2という結果であった。これからの避妊法を問うと、67.9%がコンドーム、12.4%が「性交を持たない」と回答するなど、豊かな性生活とはほど遠い結果となっている。確実な避妊法についても、コンドームと回答した者が3分の1で、コンドーム信奉の深さが伺える。残念なことにピルやIUD、不妊手術など近代的避妊法に対する情報不足故か、信頼を寄せていないだけでなく、「使いたくない」と回答する例が、ピルでは34.3%、不妊手術31.5%、IUD21.7%にも及んだ。
- 2) 近年、メディアの提供する様々な性情報が、若者たちのリプロダクティブヘルスに及ぼす影響が危惧されている。本研究では、これを少女雑誌の中で扱われている①ダイエット記事と②性情報が、思春期女子の健康に如何なる影響を及ぼしているかを検討した。その結果、①思春期女子を読者層とする雑誌に掲載された「ダイエット記事」などに触発されて、脅迫的な瘦身願望を抱かされ、結果として月経が止まるなど健康障害を引き受けている。日本家族計画協会クリニックで体重減少性無月経の診断を受けて加療中の患者52人についてみると、少女雑誌の中で関心が高いのが、ファッション、グルメ、ダイエット。中でも、実際にダイエットに走った者が9割にも及んでおり、その方法は、間食を止める、食事量を減らす、カロリー計算をする、スポーツなどを挙げている。ダイエットのきっかけは、「痩せている方が可愛いと思った」「流行の服が着たいから」。そのための理想体重は43～45キログラムが大半で、50キログラム以上はなかった。しかし、これらダイエットを特集している少女雑誌の中には、結果として起こる危険性が高い健康障害について言及しているものは皆無に近い。②少女雑誌の日米比較では、米国の場合、恋愛を精神性と身体性の両面から捉え、セックスだけを興味本位に取り上げてはいない（セックス関連記事は全体ページ数の5%以下）。

更に妊娠やSTDの問題は、うつ、拒食、麻薬など若者を取り巻く数々の問題の一つとして取り上げ、セイファー・セックスにも言及している。一方、わが国の場合、一般総合誌の性情報は5%未満であるものの、H系雑誌ではいずれも25%以上となっている。最近では、その多くが、一般少女の性体験などによって占められており、内容的に売春行為をカジュアルに捉えている傾向が強い。過去17年間の少女メディアの性情報量が大きく変化していないことをみると、近年の女子中高生などの性行動の変化は、成人男性向けメディア情報の内容の変化が大きく影響しているようだ。

見出し語：リプロダクティブ・ヘルス、世界保健機関、家族計画、
避妊、性感染症、低用量経口避妊薬、メディア、思春期

今後の研究方針：

- 1) 低用量ピルの認可が今秋にも実現の方向にあるが、専門家が危惧するSTDの拡大を防止するために、ピル認可後のSTD特にクラミジア感染症への罹患状況などについて詳細に検討したい。
- 2) 若者達がメディア情報に惑わされることなく、取捨選択する能力を醸成するためには、何が必要かなどについて研究を重ねたい。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:

世界保健機関(WHO)が定義するリプロダクティブヘルスとは、「人間の生殖に係るシステム、その機能と進行する過程のすべての側面において、単に疾病や障害がないというばかりでなく、身体的、精神的、社会的に完全に良好な状態にあることを指す。したがって、リプロダクティブヘルスとは、人々が安全で満ちたりた性生活を営むことができ、子どもを産むか、産まないか、いつ産むか、何人産むかを決める自由をもつことを意味する」。この定義を踏まえ、1997年度においては、以下二つのリサーチクエストションについて研究を進めた。

1) 家族計画と女性の健康に関する研究

2) メディア情報が若年者のリプロダクティブヘルスに及ぼす影響

具体的に、1)については、わが国におけるリプロダクティブヘルスの現状、中でも、「家族計画」に係る諸問題について調査研究するとともに、低用量ピルをはじめとした近代的避妊法の導入が遅れているわが国に期待される将来に向けての取り組みなどについてまとめた。また、2)については、やや異色なテーマではあるが、近年、特に未婚期の若者達に見られる性行動の加速化、多様化などによってもたらされる望まない妊娠や性感染症への罹患など、生涯を通じた女性の健康づくりという面から、この時期の課題は極めて深刻である。特に、若者達の性行動や心身の健康に大きな影響を及ぼしているメディア情報にも着目して調査研究を進めた。